

# イギリスにおけるいじめ対応への提言（翻訳）

—電話相談センターからの報告（I）—

鈴木 幸 平

The Report from the British Centre  
for Telephone Counselling on Bullying (I)

Kohei SUZUKI

2015 年 11 月 11 日受理

## 抄 録

イギリスの電話相談センター ChildLine の『Why Me?: Children Talking to ChildLine about bullying』は、いじめ解消に腐心されている学校ばかりでなく、青少年相談施設などの行政機関にも、具体的かつ有益な示唆を与えてくれる貴重な資料の一つであると考えられる。

第1章から第5章までは序章的側面が多いため、第6章から第8章を以下のとおり翻訳する。なお、第9章以降については紙幅の制限により別稿とする。

また、原書の全体構成は次のとおりである。

- 第1章 序 文
  - 第2章 チャイルドライン調査
  - 第3章 学校における事例
  - 第4章 「いじめ」とは何か
  - 第5章 いつ、どこで、どのくらい起るのか
  - 第6章 誰がなぜいじめするのか
  - 第7章 いじめの影響と結果
  - 第8章 助けを求めること
  - 第9章 いじめに対する学校の行動計画と対応
  - 第10章 結論 子どもからのメッセージ
- 救済：言葉から行動へ

キーワード：いじめ、対応策、学校教育、イギリス、チャイルドライン

## 第6章 誰がなぜいじめるのか

「ぼくはいじめる人には本当はなりたくない。だけど何か嫌なことをしたくなる時が時々あって、それでいじめてしまうんだ」とフェイクは言う。彼は15才、いじめは習慣になってしまって、いじめに快感をおぼえている。しかし、「いじめた後はなぜかみじめになる」とも言っている。

全く同じ状況が、友達の影響でいじめることが習慣化したジェニーも「いじめている時は快感だけど、いじめた後はつくづくいやになるよ」と語っている。ジェニーは自分がいじめているということで電話してきた10人の内の1人である。この報告に間違いがないことは学校での調査によっても裏付けられている。子どもはいじめの行為について積極的に気持ちを打ち明けてくれている。このおかげで我々はいじめる側といじめられる側の両方の観点から、誰がいじめるのか、なぜいじめるのかを検証することができるようになった。実は「なぜ」ということが両グループを当惑させる大きな問題なのである。

### 1 誰がいじめるか

学校調査が明らかに示しているように、いじめる側といじめられる側の堺は、明確になっていない。小学生の15%、中学生の12%が、過去1年間にいじめられたことといじめたことの両方の経験をしている。前年度にいじめられた小学生の3分の1、中学生の半分が、本年度になったら今度は他の子どもをいじめていたのである。

<表14> 調査対象の子ども<いじめた子ども>

Primary schools						
	Girls	%	Boys	%	Total	%
Ever been bullied	69	62	60	65	129	63
Been a bully	32	29	28	30	60	29
Both bullied and a bully	27	24	23	25	50	24
Been bullied this year	53	47	44	47	97	47
A bully this year	21	19	16	17	37	18
Bullied this year/a bully	17	15	14	15	31	15
<b>Total surveyed</b>	<b>112</b>		<b>93</b>		<b>205</b>	

Secondary schools						
	Girls	%	Boys	%	Total	%
Ever been bullied	119	52	98	39	217	45
Been a bully	104	46	102	40	206	43
Both bullied and a bully	71	31	53	21	124	26
Been bullied this year	71	31	56	22	127	26
A bully this year	58	25	61	24	119	25
Bullied this year/a bully	33	14	23	9	56	12
Total surveyed	228		253		481	

43%の中学生、29%の小学生が、学校でいじめに加わったと言っている。（表 14 参照）中学生の方が小学生よりいじめが多いことを認めている。小学校では、少人数の子どもが多くはいじめをしているということかもしれないが、中学生の方が自分のしていることがいじめであるとの認識力がより強くあり、悪いことをしているのだということを認める気持ちがあるということのようにも思える。

「最も頻繁に起こるいじめ」と子どもが認めるいじめの形態は、人をののしることであった（いじめた子どもの約 80%）。最も頻度が少ないように見えたいじめは、単に押し付けたりする身体的接触を除いた、身体への暴力であった。（いじめた小学生の 12%、中学生の 22%）。身体への暴力の多くは、少人数の子どもによってなされているようだが、いじている側の子は、他のいじめの形態に比べると身体的暴力については、あまり認めたがらないようにも見える。

## 2 大人によるいじめ

子どもの大部分が、子どもによるいじめについて不満を述べているが、大人によるいじめもあるという子どももいる。これは主に自分の父親や母親によるいじめを挙げている。全いじめ相談の中で 4.4%の子ども（188 人）が「大人にいじめられた」と言っている。その内、34 人は「教師にいじめられた」と言っている。

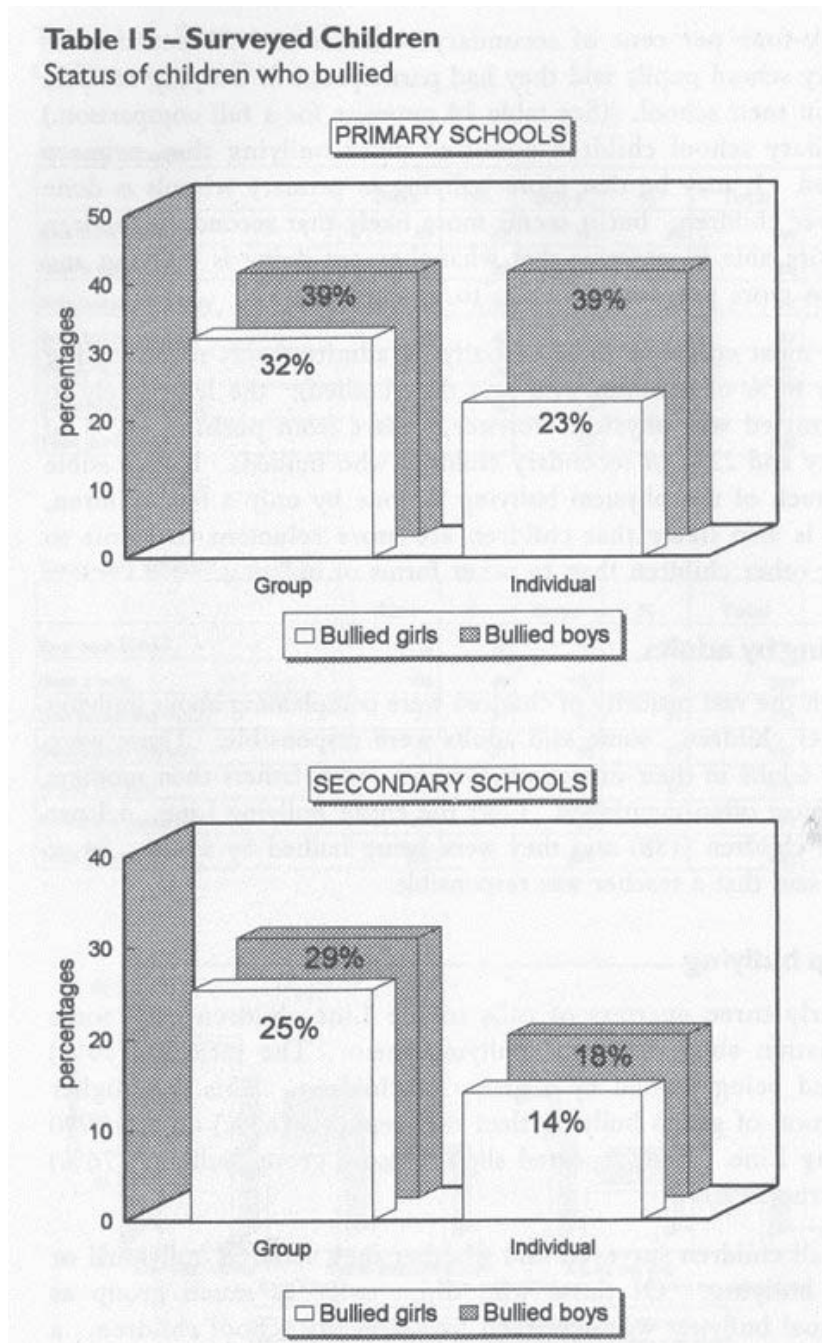
## 3 集団のいじめ

電話相談の 4 分の 3 の子どもは、誰が自分をいじているかという情報を伝えてきた。大多数（73%）は子どもの「集団」によるいじめを訴えてきている。これは 1990 年の報告数（65%）より高い割合である。男子（76%）の方が女子（71%）より、やや多い集団によるいじめを報告している。

調査したすべての子どもが個人又は集団によるいじめを受けたかどうかを語ったわけではないが、中学校では集団によるいじめが個人によるいじめの数のほぼ 2 倍にのぼることが報告されている。小学校の女子では個人によるいじめは集団によるいじめ

の3分の2であり、男子では集団によるいじめと個人によるいじめは同数である。（表15 参照）

<表 15> 調査対象の子ども<いじめた子どもの状況>





#### 4 いじめの性別

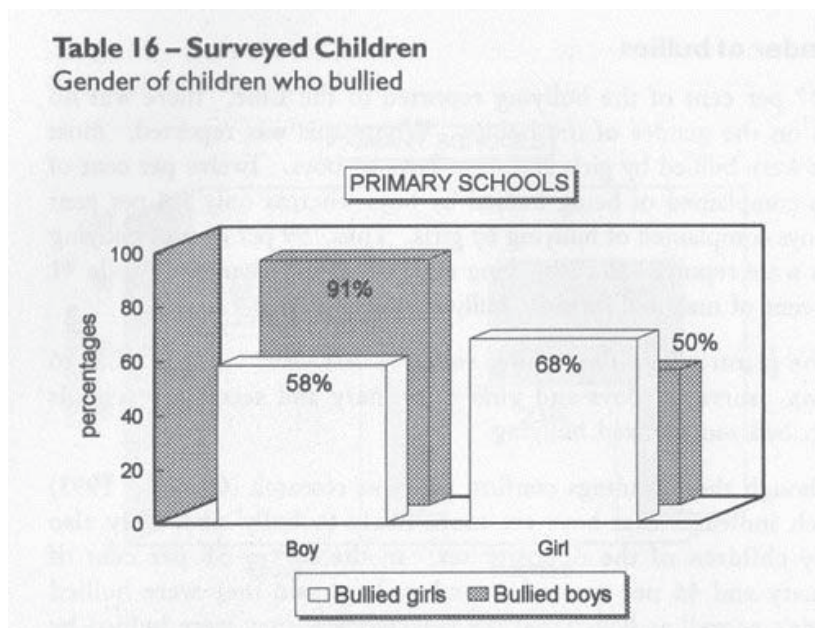
電話相談への報告の内、27%の報告には性別のデータはなかったが、ほとんど、女子は女子によって、男子は男子によっていじめられている。女子の20%が「男子にいじめられた」と述べたのに対し、「女子にいじめられた」と言った男子はたった1.4%であった。このように女子のいじめの99%は同性によるものである。一方、41%の男子は女子をいじている。

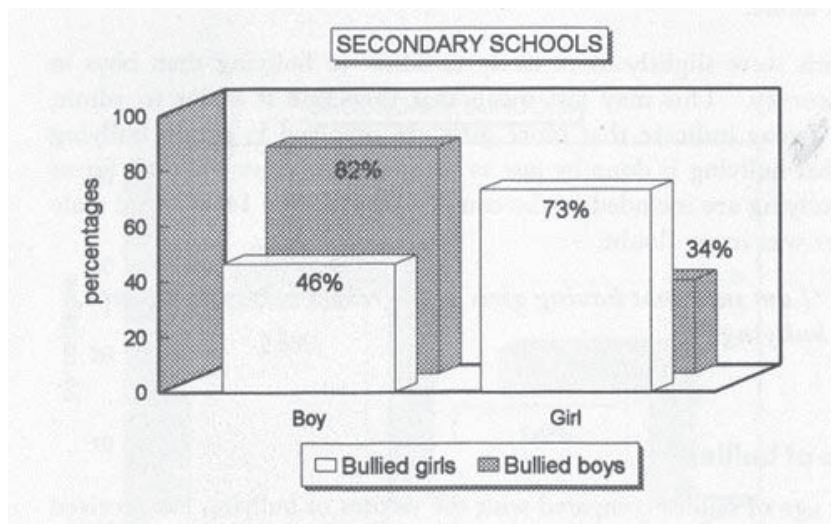
しかし、学校調査ではこの性別によるいじめの状況は判然としない。表16が示すように、調査された小学校と中学校では男女入り混じったいじめを報告している。この調査結果は、研究者による調査結果（オルヴェウス、Olweus1993）を裏付けることができる。つまり、男子は女子をもいじめやすい傾向があるというものである。その調査では小学校では58%、中学校では46%の男子が、男子からも女子からもいじめられたと言う。10%の女子は女子からのみいじめられたと言っている。

その調査によると女子の方がわずかではあるが、男子よりいじていることを認めやすいようである。これは認めた方が楽だということかもしれない。しかし、女子の方が「集団」によるいじめが多いとか、すべての形態のいじめが含まれるとすると男子と同数の女子によるいじめがあることを示しているのかもしれない。14才の男子は次のように言い切っている。

「女子を学校に入れば、いじめ防止に役立つことはまちがいない」

<表16> 調査対象の子ども<いじめた子どもの性別>





## 5 いじめの年齢

いじめられる側と比べて、いじめる側の年齢がかなりの調査において注目を集めている。年上の子どもが年下の子どもをいじめるという固定観念があるが、いじめ電話相談からの報告によれば、いじめは主に同じ年齢の仲間の中で起きている。子どもの60%は、いじめる子どもはいじめられる子どもと同じ年齢であると言っている。自分より年下の子にいじめられた例は1%以下である。

学校調査でも同じ状況がみられる。＜表 17＞には、誰がいじめられるかという点において、年齢がある役割を果たしているということを示している。そして子どもが年長になるにつれ、いじめる側の子どもの年齢がいじめられる子どもと同じになっていくようだ。

小学校の上級生は、中学校に入ると何が起きるかということについて恐れをいんでいる。彼らはいじめの程度が中学校でひどくなるかもしれないと心配している。特に入学したては彼らが最下級生になるからである。13才のビッキーが思い出しながら次のように説明してくれた。

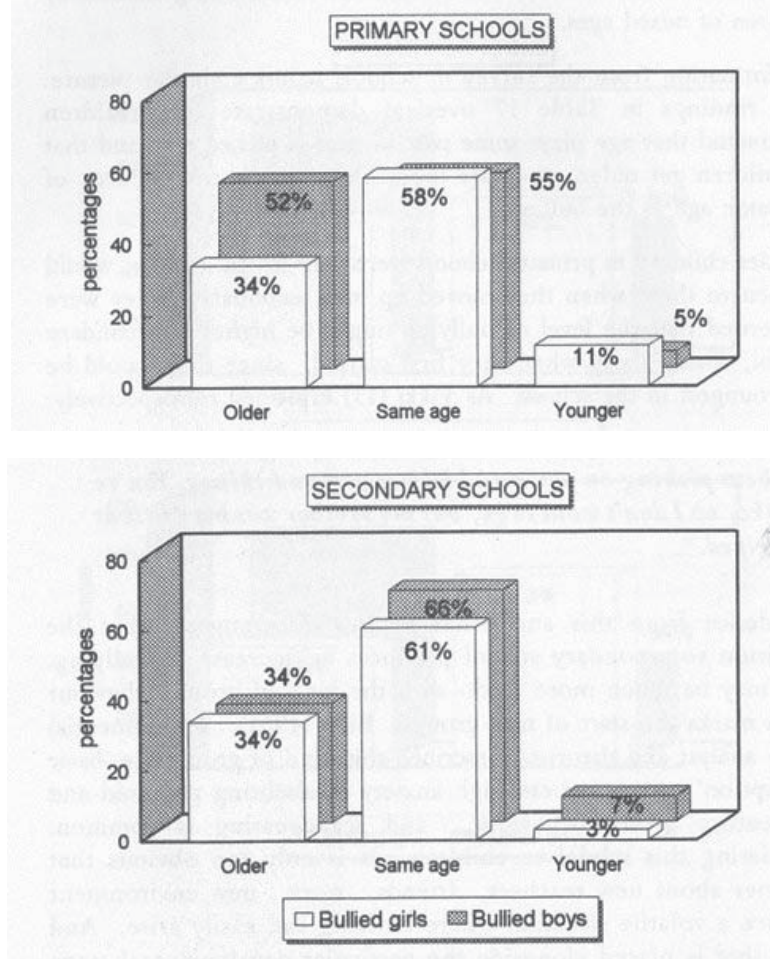
「そう、小学校では最上級生でいたんだけど、中学校では最下級生になる。上級生が実際にいじわるくなって「誰かをいじめたり蹴ったりする」などという噂が広まったの。みんなは「もう、中学校へ行きたくないなあ」という感じだった。でも私は兄が中学校にいて助けてくれたからよかったけどね」

本研究や他の研究でも、中学校に進むといじめが増えることをよく示している。これは新しい集団づくりを示すグループの動きと関連があるかもしれない。有力な集団分析家で理論家のビオン(Bion) (1961) は、この種の集団は基本的には「見せかけの集団 (a basic assumption group)」であると述べている。一般的に、新しい集団が

できると、そこでは大きな不安によりパラノイド（偏執病）やグループで他の人を迫害したくなる気質が生み出されている。そして「いけにえ」が必要になってくる。この例を子どもに置き換えてみると、新しい教師や友達、新しいことを学ぶ勉強、新しい環境では、いじめが簡単に起こりうるし、爆発しやすい状況が生み出されるのである。そして、思春期初期の感情などを考慮に入れると、個人やグループの均衡状態が打ち壊されてしまう脆さが、この時期に現れても驚くことはないであろう。したがって、この時期に、新入生に対する教師や上級生の監督や組織的な援助があると、いじめの程度や深刻さをかなり減らすようである。

<表 17> 調査対象の子ども<いじめた子どもの比較年齢>

**Table 17 – Surveyed Children**  
Relative age of children who bullied



## 6 なぜ子どもはいじめるか

「僕はいじめをやめたいんだけど、やめようとするワルのリーダーが僕を殴るんだ」

「僕は自分を強く見せるためにいじめを始めた。それで、僕をいじめる人もなくなった。今は習慣になってしまってやめられないんだ。本当はやめたいんだけど」

「僕の家族は暴力で議論を治めようとするんだ。議論をまとめるのに別の方法が必要なんだ」

このような発言は「いじめをやめさせてくれ」とチャイルドラインに助けを求めてくる子どもの声である。彼らはいじめが習慣になっていることやこれまでの古い対処法にこだわっている。インタビューに答えた子どもはいじめへのきっかけとして他の人への八つ当たりを強調していた。

「たぶん、僕は何かに腹を立てていて、誰か他の人にその不満をぶちまけていたんだと思う」

「僕は、時々僕がいじめられないために別の子をいじめなくてはいけなかったんだ」

いじめられたということでチャイルドラインに電話してくる子どもの多くは「なぜ」いじめの対象に彼らになってしまったのかを知りたがる。いじめられた子どもの多くは「いじめた人の悪口を言ったからだ」など表面的な理由には気づいている。しかしながら、カウンセリングの中で、子どもは自分でもよくわからない変な性格が自分自身にあるのではないかと、いじめの対象になるような何かを自分自身がしてしまったのではないかと、という内面的な理由をしばしば口にした。

子どもが助けを求めてきた親や教師の返事が、逆に子どもの心配をさらに強めていることがたびたびある。大人は「どうしていじめが始まったの?」、「いじめる人たちに君は何をしたの」、「理由なしでいじめられることはないよ」と言うのである。

ある種の子どもがいじめを駆り立てたり、いじめの原因となったりしているという見方はいじめに関する文献では一般的である。いじめられる子どもたちは、それは教師の間では共通の見方であると言う。ピカス（1989）はそれを「挑発的犠牲者」と定義づけた。その子の態度が他の子どもをいらだたせ、怒りを引き起こすのである。このような考え方が元となり、いじめる側の子への対応策が生み出されてきた。それは、いじめっ子にそれ以上のいじめをさせないような特別の対応をするようにしたものである。いじめられた子どもは、社会訓練やカウンセリングの便宜をうけているが、一方、大人や他の子どもは、いじめという厄介なものをある意味で正当化してしまったり、いじめと取り組むというより、いじめられる方を非難したりすることもあるからである。



いじめを受けたという経験をする、結果ではなく、原因として情緒的に又は教育的に難しくなることがある（オルヴェウス Olweus 1995、ファリントン Farrington 1993）。どうやって行動したらよいのかわからなくなってくると打ち明けている子もいれば、自分が他の子どもの気分を害する傾向にあることを素直に打ち明けた子もいる。しかしいじめられた子に焦点を当てて研究しても、問題の複雑さを見極めるのには向かない。ある子どもは、複数の理由を選び出すかもしれないし「特に理由はない」と言うかもしれないからである。

これと同様に多くのいじめの調査は、いじめを家庭不和と関連させたり、子どもを小さい頃からの攻撃的、衝動的傾向と関連させて子どもの個人的性格に焦点を当ててきた。

子ども自身が述べるいじめの様子というものも実はあいまいであり、複雑である。訴えられているいじめの70%以上が集団によるいじめであるという事実を考えると、その原因として我々は個人の性格を探っていくのと同時に、グループの組織の様子も探る必要がある。変化している環境の中でどのように集団が変化していくのか、また、その構造は社会や文化の影響をどのように受けているものなのかといった、子どもの集団の力学について理解を深めると言うことは、これまでほとんど注意が払われてこなかった。学校をあげての取組みが深刻ないじめを減らしてきたという事実は、学校の姿勢や方針というものがいじめ撲滅の重要な要素であるということを示している。

集団によるいじめは、グループの特定の個人によって仕組まれている可能性がある場合があるかもしれない。しかし、個人の子どもの病理を探るということについては、いじめを理解する上では限界があることも確かである。

子ども一人ひとりに焦点をあてて、子どもに「なぜ子どもはいじめめるのか」という問いを発しても、ほとんど手がかりは得られない。しかし、子どもが自問自答すれば、多くの問題点は明らかになってくる。子どもが自分自身について語っているのか、他の子どもについて語っているのかによって答えが異なるのである。

いじめた子どもはいじめめるのに格好の状況があったこと、いじめが習慣化していたこと、そして、いじめる楽しみを語るけれども後で後悔していることを述べる。いじめたということで調査された子ども（事例の23%）はその原因について常に2つ以上の説明をしているが、主に怒り（52%）、ねたみといった感情をいじめの原因のせいにしてしている。次に他の子に「見せるため」のいじめを挙げている。おもしろいから、退屈だったから（30%）というのがその理由である。数は少ないが、騒々しい議論の後で、その議論が原因でいじめたという子どももいた。興味深いことには「嫌いだから」と言う理由はあったが、いじめる子ども自身やいじめられる子どもの「性格そのもの」を理由にした子は誰もいなかった。

なぜ子どもは学校でいじめめるのか、という一般的な質問に対する回答から、いろいろと異なった様子が浮き彫りにされてきた。八つ当たり（62%）とか口論とか気晴らしが顕著な原因だが、いじめられる子どもの個人的性格もしばしばいじめを引き起こすものとして述べられることがある。そしてそれはいじめの心理的動機でもある。つ

まり、自分がいじめられたことがあったり、家庭的に不幸であったりし、自分も他をいじめることができるということを見せびらかすことがある。14才のリサは次のように言っている。

「いじめる人たちは、いじめによって、自分が他の誰よりも「地位が高く偉く」なれると思っているのね。あの子たちは、自分を以前いじめた人のことを「硬派だ」と考えたかもしれない。だから、自分自身を硬派だと「他の人」に思わせるためにいじめを始めたかもしれないの。まあ、この「他の人」というのは仲間のような人たちのことね」

同様に10才のマックスは自分がいじめられてきたことと、他の子（特に男子）より強い力や高い地位を持つこと、それを誇示することを結びつけてしまったようだ。

「いじめっ子は小さい時からずっといじめている。自分が強くて硬派だと思っているんだ。男子は自分が女の子より強くて何でもできると思っているから余計にいじめをするんだ」

インタビューをされた7才以下の子どもはしばしば「その子が嫌いだからいじめるのだ」と単純に推測している。このことについては真剣に考える必要がある。多くの子どもは、大人と同様、相手が嫌いだから嫌がらせをすると考えている。どの位嫌であるかはその子どもの個人的な性格にかかっている。しかし、それはまた、グループ内のルールや学校や家庭の環境や方針にもよっている。そしてそのいじめを正当化して行動に移していくのはグループなのである。

インタビューに応じてくれた子どもや電話相談をしてきてくれた子どもは、「家庭問題や自分がいじめられたことで八つ当たりしたい」とか「他のいじめっ子や大人の真似をするのだ」とか「いじめが習慣化してしまったワルの仲間に加わる」とかといったことなど、いじめの理由を様々示してくれた。いじめるといふことの根本には様々な理由があることを彼らは示してくれた。15才のシャーロットは次のように述べている。

「いじめは家庭の問題かもしれない。感情を誰かにぶつけて、自分を硬派と思いたいといった興味からいじめをするかもしれない。後は「することが何もない」と言っていじめるんじゃないかなあ」

気質や個人的な性格によっていじめを分別するのは、いじめという行動の根本を単純化しすぎるであろう。このような考え方は、逆にいじめている子どもやいじめられている子どもにいかに関わり、どうやっていじめを減らすかということについての考え方にも限界を生じさせてしまう。また、いじめの影響から子ども自身を解放させよ

うとしても、限界を生じさせてしまう。

いじめ対策は、集団行動に焦点を合わせるべきであるということは、明らかである。子どもの集団力学を理解し、いじめ集団を散会させる技術を修得した教師が必要である。また、電話相談においても、学校の事例においても、いじめ対策として「集団を理解するための技術」などの実質的なアドバイスも必要である。

## 第7章 いじめの影響と結果

「もし私が誰かにいじめたことを言ったとしても、誰も私を信じないでしょ」

「私はいつもいじめについて考えている。私は転校したいけど、母は『そんなことをしたところで何の助けにもならないし、いじめはまた起こるよ』と言っている」

「なぜだか分からないが、たとえ私が空手を知っていたとしても、彼らに抵抗できる訳じゃない。それは両親が離婚した時と同じくらい辛いことだから」

「私は毎日泣いています。最悪な気分。先生は『いじめは私自身に原因がある』と言う」

子どもは、いじめ電話相談の時でも、学校でのいじめに関する面接調査の時でも、いじめによる影響（特に悲慘さ、無力さ、そして絶望感）を強調していた。13才のハージートは、面接中、学校で同級生の男の子のグループに人種差別的な悪口を言われた。その時、どのように感じたかを次のように説明している。

「それは身の毛がよだつもので、僕は学校に行くことにおびえていました。時々彼らと違うクラスだとほっとしたんだ。同じクラスの時には、彼らから離れて座るなどして、彼らの関心を引かないようにしたんだ」

子どもは、一般にいじめを受けたことについて、孤独感、恐怖、悲しみを感じ、場合によっては憤りを覚えると報告している。また、彼らの頭はいじめのことでいっぱいである。彼らはいじめのことを忘れることはできなかった。たいへん長い期間にわたっていじめられた影響について話す子もいた。

「私は自信を取り戻すのに本当に長い時間がかかりました……本当に何年もかかった。今でもいじめのことを考えると気が動転してしまいます」

多くの子どもにとって、こういった感情は、他人との人間関係にも及ぶ。彼らは他人とうまく付き合えなくなってしまう。最初に親や兄弟との関係にその影響が出る。特に、いじめをやめさせる能力が無かったり、他人に自分の抱えている問題を打ち明けられなかったりする子どもにこういった状況が見られた。12才の女の子のキャッ

シーはいじめられていた時どのように感じていたかを説明している。

「今、私は以前に比べて幸せです。私は本当に親とうまくいっていますから。けれども、私をいじめ続けてきたクレアとのことになると、実際、私は親にひどく反抗したことがありました。私は学校でのいじめについてどうすることもできなかったので家で父や母に八つ当たりをしたのです」

電話をしてくる子どもがカウンセラーに語るいじめの影響の中で共通しているのは、心の問題であった。電話をしてくる子どもの大多数は、悲しみやみじめな気持ちでいっぱいであり、3分の1の子どもはいじめの恐怖の深刻さを話している。自分自身のことを「気落ちした子」、「不安な子」、「本当に元気がない子」と言っている子どももいた。いじめられたことやそのことについて何もできなかったことを「恥だ」、「屈辱だ」と何度も何度も述べている。このために子どもの中には起こっている気持ちを他人に言うのをはばかるなど、いじめが自尊心に大きな影響を及ぼしている。

いやいや学校に行っていると報告した子どももいる。学校に行くことを避けるために仮病をする子、ずる休みをする子、自分でわざとケガをしようと考えた子もいた。頭痛、胃痛、喘息の発作の増加に苦しむ子もいた。15%の子がいじめは学校での活動に影響を与えていると報告している。

## 1 自殺への衝動と試み

「最近、私は自殺について考え始めています。私はあまりにも恐ろしくて、これから社会生活なんかとてもできないわ。私は学校でも学校の外でも、びくびくしながら毎日を過ごしているんだから」

このように13才のジルは数か月間にわたって悪口を言われたり「暴力をふるうぞ」という脅かしを受けたりした時の心境を述べている。現在、他の学校に通っている幼友達が、ジルと同じ学校の子をけしかけて彼女をいじめさせたのである。彼女の親はその問題を解決するために何度も学校へ行ったが、校長先生には会うことすらできなかった。学校の連絡調整係の先生は彼女の母親に「しばらく学校を休ませるように」と言った。

彼女は自殺願望や自殺未遂について、カウンセラーと話し合った子ども（4%—62人の子ども）の一人だった。さらに、友達からの通報により、自殺願望があると見なされた子が7人いた。自分の息子が実際に首吊り自殺をしようとしているのを見つけ、電話をかけてきた親が2人あった。自殺願望や自殺未遂は、女子より男子の方が多く見られた（女子4%に比べ、男子7%）。男子の自殺が劇的に増えていることや年長の男子が助けを求めるのが難しいということを考えると、このことはとても深刻なことである。

自殺願望の子どもの内、いじめられた期間が比較的短期間（1か月以内）であった



のは、わずか5人である。大半の子どもはかなり長い期間いじめられてきたのである。

これらの事例が、残酷で肉体的ないじめに限られたものではないということを知っておくことは大切である。半数（52%）以上のいじめがもっぱら言葉による暴力（一般的には悪口を言われること）である。拒絶、屈辱、悪口は、子どもの平常心を失わせてしまうものである。全寮制の学校の女の子が「精神的ないじめは肉体的ないじめよりひどいと思うよ」と言ったように、この種のいやがらせを受けながら、自分のことを魅力的で価値ある人間だと信じ続けることはとても難しいものなのである。

いじめによって、子どもは自分の人生を台なしにしたり、時には自殺にまで追い込まれたりする場合がある。何人かの子どもの自殺がいじめと関係している（スミスとシャープ (Smith and Sharp) (1995)）。身体的な攻撃だけでなく、言葉によるいじめを受けてきたからだと報告された事例もある。自殺願望や自殺未遂を報告している子どもの事例から、いじめのいくつかの形態を「軽いいじめ」と分類するのは危険だ。ささいなこととして大人に忘れられてしまういじめの場合は、根本的に子どもの幸福感や自尊心をひそかに傷つけてしまうことがあるからだ。

どの子がいじめに自曝的な対応をする子なのかを識別する確かな方法はない。だから、いろいろないじめに対して厳しくすべきだというような先入観だけを持つことよりも、子どもの表す考えや感情に耳を傾けて相談にのってやるのが大人のすべき責務である。

## 第8章 助けを求めること

「この学校ではいじめを減らすためにいろいろな試みをしていると思うけれど、何をしてくれようとしているのか、あまり説明がないんです。だから、仮に、いじめに会っている子がいたとしても、先生たちが何をしてくれるかわからないので、先生たちには話したがないと思います」（14才のオーガスティン）

「僕は1人の小さな男の子が公園で何人かの人にいじめられているのを見ました。彼らはその子を罵倒し、蹴っていました。僕は彼らが僕に敵意を示すかもしれないと思って、怖くて何もできなかった」（13才のダンカン）（実は、自分自身がいじめに会っているため、助けを求めて電話をしてきたのである。）

子どもはいじめられている時、自分が助けを求めないから助けが得られないのだと一般的に信じられている。が、本当は、彼らは自分に何が起きていることを説明することができないのだ。17%の子どもがいじめ電話相談にかけてくるが、その中の14%が実際いじめに会っていた。しかしながら、いじめに関するこの研究や以前から

の取組みで分かることは、たいていの子どもは必死に助けを求めているということだ。いじめられている子どもは、いじめをしている子どもに脅えたり、いじめをされていることを恥だと思ったり、いじめのことを誰かに言ったら、その後どうなるかを心配に思っている。けれども、実は大人や他の子どもに繰り返し、繰り返し助けを求めているのだ。いじめについて電話をしてきた子どもの大多数は、大人が助けようとしたにもかかわらず、依然としていじめが続けられているとこれまで語ってきた。学校によっては、いじめは以前より少なくなり、いじめの期間も短くなり、いじめの解決に向けて前向きになってきたという点で、状況はかなりよくなっている。これらの学校はもちろんいじめ問題に敏感であり、みんないじめをなくそうと努力してきたからだ。しかし、こんな学校でも、多くの子どもがいじめについて訴えてきたにもかかわらず、相変わらずいじめが続いていると話している。子どもの経験を通してでてきた質問は「なぜ」である。なぜ個々の子どものいじめをやめさせることがそんなに難しいのだろうか。何が起きているかを本気で話そうとしている子どもの説明に大人がもっと耳を傾ければ、私たちは、何らかの答えを見つけ出せるはずだ。

## 1 いじめについて話さない子ども

「あの人たちは、私に『必ず仕返しするぞ』『殺してやるぞ』と言ったんだ」と11才のクリスは、いじめられたことを他の子に話したために生じたその結果について語っている。

電話をしてきた子ども（17%）の中には、自分のいじめについて他の誰にも話さなかった子もいた。この傾向は一般的に男子の方が女子よりも多く見られた。一連のいじめの行動は語られるけれども、ゆすりをされてきた子どもはおそらく誰にも話さなかった可能性がある。75人の子どもの内、3分の1以上（38%）がお金や持ち物を力づくで奪われたという。学校の調査でも同様な結果が得られた。電話をかけてきた11才の女の子は、1年間ほとんど毎日昼食を持ち去られたにもかかわらず誰にも言えなかったと話している。

自分の物を取られた子どもは、より強い脅迫観念や屈辱感を受けている。また、盗みやゆすりをしている子どもは、標的になっている子を脅かして自分の思うようにすることに熟達しているからだ。

年少の子どもは、いじめについて話すことにほとんど不安を感じていなかったが、子どもは成長するにつれて、いじめについて話をすれば、当然厳しい結果になることを恐れるように思われる。子どもは、もしいじめについて先生に言えば、校外で打ちのめされたり、何らかの方法でいじめられたりするだろうということに怯えている。面接を受けた14才以上の子どもたちは、自分がいじめについて話したことの結果について心配する傾向が顕著だった。

## 2 いじめについて話す子ども

電話相談をしてくる大多数の子ども（82％）と、学校調査に協力してくれた多数の子ども（84％）は、いじめについて他の人にも話をしている。たいていの者は1人以上の人に話をしている（回答者の小学生 70％、中学生 50％）。

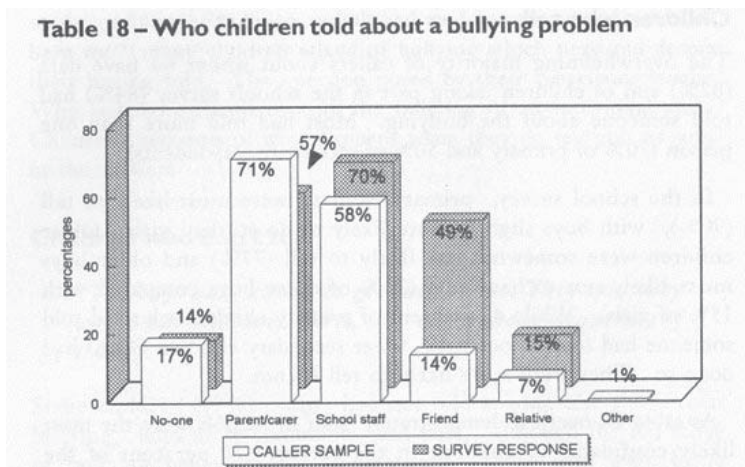
学校の調査では、小学生が最もよく話した（90％）。そして男子は女子よりわずかながら多く話す傾向にあった。もう少し成長すると話さなくなる傾向が出てきた（77％）。そして男子は特に話しながらなかった（女子の 15％に比べて男子は 33％）。小学生の 68％が学校の教師に話したのに対し、中学生は 40％とその数は少なかった。彼らは教師よりも友達に話す傾向があった。

＜表 18＞にあるように、学校の調査では、学校の教師は子どもの一番の相談相手だった（70％）。子どもは、教師に比べて親には話さなかったようだ（59％）。一方、電話での事例では、学校の教師（58％）よりも親（71％）に話す者の方が多かったようだ。子どもは、一般に、いじめに苦しんでいる子どもに同情的である学校では、教師に相談する。が、そうでない学校では、親に相談をすると思われる。したがって、そのような学校では、親は学校に対して性急な反応を期待するのである。

いじめ電話相談を利用する子どもの 14％、そして学校の調査では彼らの 49％が、これまでに友達を頼りにしてきということであった。

これらの結果は、ホイットニーとスミス (Whitney and Smith) (1993) が報告しているいじめの状況に比べると、かなり改善されている。彼らの学校の調査によると、いじめの件数の半分が誰にも告げられていなかったと報告している。チャイルドラインの調査によると、子どもは一般的にいじめの問題について人に話したがる傾向がある。しかし、いじめが起こったことを公然と認めている学校にも子どもたちは通っていることを大人は覚えておかなければならない。

＜表 18＞ 子どもはいじめについて誰に話したか



### 3 「いじめられている」と子どもが話した時、一体、何が起きているのか

普通の大人の人が取る措置の中には、子どもに好意的に受けとめられたものもあったけれども、電話相談で得られた情報は決して楽観的なものではない。全体としていじめの問題について親に話をした子どもの 57%（267 人）は、その結果として何の変化もなかったが、むしろ否定的な結果しか得られなかったことが多かった。親が学校に相談をしてきた事例の 71%（174 人の子ども）は、いじめがそのまま続いているか、あるいは、さらに、悪化しているという結果となった。一方、学校の教師が取った措置はかなりよくなってきたと言える。学校の措置がまったく役に立たないか、状況をさらに、悪化させたと報告されたのは、わずか 28%であったからである。

普通の大人の人の対応は、ほとんどの場合（69%）、大人の介入は効果がなかったか、逆効果になったかである。しかし、なぜそんなに多くの大人の介入が子どもの助けにならないのか、次にどうすれば大人の介入がより効果的なものになるのかを我々が考えるとき、子供たちの声は、おおいに役立つものとなる。いじめについて相談された時の普通の大人の人の反応には 3 つあると子どもたちは言う。また、アンケートや面接からも同様のことが言える。

- ①大人が子どものもっている問題の深刻さを受け入れてくれない。
- ②大人が子どもに横柄な態度を取る。
- ③大人が「自分で解決するしかないよ」と子どもに言う。

#### (1) 大人がいじめ問題を無視すること

いじめについて大人に相談をした時、いじめ電話相談をしてくる 10%の子どもと、学校の調査の 19%の子どもは、大人はその相談に応じなかったり、彼らを助けるための措置を講ずることを拒否したりしたと報告した。大人が子どもの訴えるいじめの相談に応じなかったり、答えようとしなかったりすると（おそらく、耳を傾ける時間がなかったからであろうが）、一連のいじめは、さらに事態を悪化させる。しかし、大人が一般的に「いじめはたいした問題ではない」、「成長期に避けられないことのひとつ」、「すべての子どもが学校時代に直面することだ」、「いじめを軽くあしらうことのできない子どもの方がいじめ自体よりも問題である」というような考えを持っていることが状態を悪化させるのである。困ったことにある親は次のようにいじめを軽視している。

「おそらくもっと悪質ないじめに注目して、そのいじめをなくすことの方が些細ないじめより大切だよ。からかったり、悪口を言ったり、仲間はずれにしたり、うわさを広げたりする程度のことを私は『いじめ』とは呼ばないね。そういったことは今までもあったし、これから先もあるだろうからね」



学校の教師が、いじめられている子どもの方を責めたり、「いじめる側の子どもを怒らせているからなんだ」、「まわりの子どもの言うことを気にし過ぎるのだ」、「親が過保護で他の子どもと日常的な触れ合いを持たせることを拒否しているからだ」とか言ったりして、自分の学校にいじめがあったことを否定していることがある。このような場合、もし子どもや親が、教師の対応に不満を訴え続けるならば、いじめられているその子の方が「問題児」として扱われるだろう。

ウィリアムは10才で、3年間ずっと体重のことでいじめられてきた。彼はチャイルドラインに「ダイエットを試みたけど痩せなかった」と電話してきた。彼は学校にそのことを言ったが、先生は「あまり気にしないように」と言った。彼はその時、学校で直面しているいじめにとっても絶望していたため自殺しようと思っていた。「眠り込んでしまって、決して目が覚めなければいいなあ」と彼は言った。このため、チャイルドラインは、この件でウィリアムの承諾を得た後、彼がこんなに悩むまで気づかなかった学校に問いを聞いた。した。

その問題行動が単なる「からかい程度」の場合、子どもが耐えられないくらいまで大きくなるのはいつごろなのか。そういうことに教師や親が気づくのは実は難しい。もちろん、いじめられている子どもの中には、自分の行動の仕方を含めて、具体的な手助けを求める子もいる。このような手助けは、いじめをやめさせるための対策とともに与えられるとよからう。

## (2) 子どものために行動を起こすこと

たいていの親（62%）は「積極的な対応」を図ったと報告している。彼らは、我が子のことをとても心配し、子どもをもとのようにしようと良かれと思っているのである。

電話の事例にある約500人の子どもは、親に話をしている。たいていの親は、教師に話をしに学校へ行ったことがあった。その内、55%の親はすぐに学校へ行った。約12%の親は、直接いじめをした子どもの親に会ったことがあった。こういった親の対応があってもいじめは続いた。

親は当然、自分の子どもがいじめられていることについて、ひどく心配しているし、できるだけ早くいじめについて何かしたいと思っている。しかし、親は自分の子どもを保護するために対応したいと思うが、子どもの意見を取り入れないでその対応を決めてしまう傾向がある。

一方、学校の教師は、様々な理由で、個々のいじめへの対応ができないのかもしれない。多分、教師には、個々の子どもの要求や願いを見つけることが難しくなるのであろう。あるいは教師には学校における権限があるから「自分の介入はいつも効果が

ある」と信じているのかもしれない。また、「これが正しいことであり、自分に期待されていることだ」と考えているかもしれない。

教師は、いじめている子どもを叱責するか、罰する傾向がある。あるいは、その親と会っていじめについて話し合うこともある。いじめ電話相談では、罰することの方が多かったと報告されている。たとえば、いじめっ子たちは教師に居残りをさせられたり、子どもの主張を否定されたり、校長室に連れて行かれたり、叱られたり、親に手紙を送られたりするだ。さらに、ほんの僅かな割合（1%以下）ではあるが、退学させられる子どももいる。つまり、いじめ対策のための適切な何らかの措置が考えられたり、図られたりした形跡はほとんどなかったのである。

ある子はいじめを教師に話したけれど、「学校のいじめ対策から自分が切り離されているように感じた」と述べている。教師は、子どもの意見を聞かずに、どんな措置を取るか決定しようとする。又は、後になって、学校が取った措置について子どもに知らせるだけのこともある。教師は普通、子どもに「学校でいじめを解決してやる」と言う。しかし、たいていの子どもは、教師が何をするのか、あるいは何をしたのか知らされないままにいることの方が多い。

### (3) 子どもにいじめを解決させる

いじめ電話相談では、大人は子どもに「無視するように」、「いじめっ子を避けるように」とか「抵抗するように」とか言っているとの報告がある。「いじめっ子を無視しなさい」という助言が最も一般的であった。いじめについて親に話をした子どもの4分の1は「いじめっ子たちを無視するように」と言われた。9%の子どもが学校の教師から同じような助言を受けていた。「自分で防御するか抵抗するように」と言われた子どもは、僅かであった。この助言は、子どもに「自分自身ですべて問題を解決しなさい」と言っているのである。しかし、13才のスーは次のように説明している。

「ずっと悪口を言っている人を無視するって、とても難しいんです。私は彼らを完全に無視するつもりだし、彼らが言うことにはまったく耳を傾けないように思っているけど、学校から帰るといじめられたことを親に言うんです。しかし、私は本当に無視できるとは思っていない。学校にいる時、無視しているように思うかもしれないが、家に帰って、いじめられていることを考えると、全部話したり泣いたりしたくなる。特に、もしいじめが絶えず続いていけば、彼らが自分のそばに近づいてきて何かを言ったら、彼らを無視することは難しいように思います。だって、彼らは他の人をいじめるいではなくて、直接私をいじめてくるからなんです」

また、「悪口を言われそうな時には、友達の下にいなさい」などと、いじめを避けるための助言をした親もいた。また、子どもに休憩時間には、教室にいるように指示した学校もあった。さらに、いじめの問題が無くなることを期待して、いじめられ

ている子どもを別のクラスに移した学校もあった。しかし、残念ながら、電話相談をしてきた子どもは、これらの措置によっても、いじめがおさまるのを見ることがなかったと言う。実際、子どもの中には、いじめを避けることがかえっていじめっ子の関心を引いてしまったという子もいた。いじめっ子は、時や場所を変えて、また、いじめてくると訴えている。

#### 4 いじめられている子どもを助けること

いじめられている仕返しとして、法律によらず「自分の手で」相手を処罰してやろうという気持ちに追い込まれた子どもからの便りがチャイルドラインにはある。このことはとても悪い結果を生むものである。その中の一人も言っているように、いじめてきた男の子を殴ったり蹴ったりしたことで、逆に自分が学校を退学になった場合もあるからだ。

「このことで自分もいじめっ子にしまった」

当事者でない人たちが「いじめっこをやり返すというようなことは分別ある行動ではない」と言うのは理に適っていることである。しかし、自分が当事者となった時、は、その理屈とその対処法とはまったく別のこととなるのである。いじめられている子どもは、一般的に「自分ひとり」では何も事態を変えることができないと思っている。一方、いじめっ子たちは他の子どもを脅かしたり、「集団」でいじめたりするからうまくいくと考えている。だから、いじめられっ子が勇敢に自分の身を守るということは言うほど易しくはないのである。「いじめを無視するように」と言う助言は何の役にも立たないと、子どもたち全員が言っている。彼らはいじめによって気が動転し、びくびくしてしまい、恐怖感でいっぱいになって、いじめを悩まざるをえなくなるのだ。そこで、私たちチャイルドラインは、調査の中で「どうしたら彼らを助けられるか」を子どもたちに尋ねた。

しかし、いじめをやめさせることはもちろん最も重要なことだが、制裁や処罰以外には対処する方法がほとんど見つからなかった。たいていの子どもは、いじめをやめさせることができればいいと望んでいたけれども、いじめをなくすために大人がどのように介入すべきかははっきりとは答えられなかった。

これまで調査の対象となった子どもによると、あり余るほどの最近のいじめ対策の手引書や、学校用いじめ対策案が学校にも送付されていたが、驚くほど利用されていないことが分った。たとえば、「非叱責法 (No blame)」、「共感法」(Method of shared concern) のようなグループで行う方法は取り上げられていなかったし、いじめ電話相談も投書箱もピアカウンセリングもメンターリングや仲介方式も取り上げてくれなかった。そういった方法は多くの学校のレパトリーには入っていないだけでなく、親や教師あるいは子どもにも広く知られている様子はなかった。

親や教師あるいは子どもは皆、いじめが子どもの情緒に与える衝撃を理解し、このことにも取り組むべきことであるとは思っていたが、彼らが本当の助け方を知っているという自信は何もなかったのである。子どもは、いじめられてきた子どもに優しくするとか、助けを求めてその子を教師のところに連れて行くという程度であった。

「いじめられている子に、誰かが話しかけて、安心させたり、元気づけたりしてあげてほしい。だって、自分の気が動転した時、いじめっ子はその僕の動転に感づいてくるからね」と14才のポールは言っている。

多くの年長の子どもは、他の子にいじめられているのはいじめられている自分のせいではないのだから、いじめのことを他の人に話すことが大切だと思っている。親や教師は子どもに自信をつけることが大切だと感じている。教師の中には子どもはもっと自己主張することが必要だし、その結果、子どもは、再びいじめの犠牲者とはならないはずだと感じている子もいた。

いじめ電話相談にかけてきた子どもは、いじめに対する感情やいじめが感情に及ぼす影響についてカウンセラーと話し合うことと、いじめを解決する方法を自らが見つけ出すことの両方を強く望んでいる。概して、彼らは簡単に無視されたりあるいは退けられたりしたという感情を抱いている。たいていの子どもは、いじめについて大人に話せると思っていたけれども、自分の悩み、苦痛、不安の程度を明らかにすることが実は非常に難しかったのだ。以上のことは、もちろん、いじめをやめさせるための措置と精神的な支えの両方がいじめの解決に必要であることを示しているので、そのことを本書の最後の項で述べることにする。

#### 参考文献：

- Dosani, Sabina (2008) *Bullying: 52 Brilliant Ideas for Keeping Your Children Safe and Secure*
- Hemp, Lara (2011) *Victim of Bullying: The day I stood up and said No more!*
- Morris, Olivia (2010) *The Big Blue Bully*
- Olweus, Dan (2013) *Bullying at School: What We Know and What We Can Do (Understanding Children's Worlds)*
- Wiley, Dina (2015) *Bullying 101: Change will come: Ultimate guide for victims who have been bullied*
- 魚住 絹代、岡田 尊司（2013）「子どもの問題いかに解決するか」PHP 新書
- 尾木 直樹（2013）「いじめ問題をどう克服するか」岩波新書
- 向山 洋一（2012）「「いじめ」は必ず解決できる」扶桑社
- 山脇 由貴子（2006）「教室の悪魔 見えない「いじめ」を解決するために」ポプラ社
- ヤング, スー（2012）「学校で活かすいじめへの解決志向プログラム一個と集団の力を引き出す実践方法」金子書房



**いじめ相談機関：**

① 24 時間子供 SOS ダイアル（文部科学省）

平成 19 年 2 月より実施していた「24 時間いじめ相談ダイアル」について、「いじめ」に限らず子供の SOS 全般を受け止める窓口であることを明確化するため、平成 27 年 4 月より、「24 時間子供 SOS ダイアル」に改編された。電話すれば、夜間・休日を含めていつでも、原則として電話をかけた所在地の教育委員会の相談機関に接続される。電話番号は 0570 - 0 - 78310。

② 子どもの人権 110 番（法務局）

「いじめ」や体罰、不登校や親による虐待といった、子どもをめぐる人権問題は周囲の目につきにくいところで発生していることが多く、また被害者である子ども自身も、その被害を外部に訴えるだけの力が未完成であったり、身近に適切に相談できる大人がいなかったりする場合が少なくない。「子どもの人権 110 番」は、このような子どもの発する信号をいち早くキャッチし、その解決に導くための相談を受け付ける専用相談電話であり、子どもだけでなく、大人もご利用可能。電話は、最寄りの法務局・地方法務局につながり、相談は、法務局職員又は人権擁護委員が受け付ける。相談は無料、秘密は厳守される。電話番号は 0120-007-110。

③ チャイルドライン（NPO）

1970 年代の北欧で、子どもをサポートするためのホットラインが誕生した。その後世界に広がっていき、1986 年、虐待が社会問題化するイギリスでもチャイルドラインが始まり、日本はイギリスチャイルドラインをお手本に活動が始まった。現在では、145 国で 191 のチャイルドヘルプラインが活動し、チャイルドヘルプライン・インターナショナル（CHI、事務局はオランダ・アムステルダム）が世界をつないでいる。日本のチャイルドラインは、1999 年に「チャイルドライン支援センター」が立ち上がり 2014 年 11 月現在 42 都道府県で 72 の団体がチャイルドラインの活動をしている。電話番号は 0120-99-7777（無料）毎週月曜日～土曜日の午後 4 時～午後 9 時まで。対象は全国の 18 歳までの子ども。

